青年學生の「文學」に對する態度の測定

COLLEGE STUDENTS' ATTITUDES TOWARDS LITERATURE

佐 野 勝 男*

By SANO, KATSUO

I 問 題

現代の青年學生は「文學」に對して如何なる態度をもっているかを測定せんが爲に、L. L. Thurstone (1) の等現間隔法 Equal appearing intervals により「文學」に對する尺度を作り、この尺度を青年學生に施行した。更にこの結果得られた「文學」に對する態度と両親の教育程度、「スポーツ」に對する態度 (2) 及び性格の男性度女性度 (3) との関係をみようとした。

II 測定對象の吟味

社會的態度を測定せんとする時、測定の對象が明確なものであり、自分の態度に即して判斷してゆく時容易に賛否を表現し得て、しかもその判斷の過程に於て對象が他の類似のものに移行することのないようなものが望ましい。しかるに「文學」の場合はその意味する所が廣く且つ漠然としている感をうけるのであるが、調査對象が青年學生である爲、大體に於てこの年齢迄にはいろいろな文學作品にもふれる機會もあり、「文學」というものに略々定まつた概念を持つに至つてのではないかということを豫想した。それ故「文學」を定義づけずに「日常友達と話し合う時用いる感じ」によつて判斷させることにした。このことは尙検討を要するものと思われるのであるが、これらを側面的に多少の検討を加える爲、「文學」の範疇に略々入ると思われるもの九種——即ち(1)小説 (2)大衆小説 (3)探偵小説 (4)戯曲 (5)詩 (6)和歌 (7)俳句 (8)隨筆 (9)文藝評論 をあげて自分の最も好むものに○印をつけさせてみた。調査の對象となつた人員は男子大學豫科生 453 名、女子專門學校生徒 165 名、計 618 名である。その結果男女合計の順位は(1位)小説、(2位)隨筆、(3位)詩、(4位)探偵小説、(5位)文藝評論、(6位)大衆小説、(7位)俳句、(8.5位)和歌、戯曲となつて居り、男女差は男に於て大衆小説が3位を占めるに對して女子に於ては 8.5 位を占めていることだけである。しかも小説隨筆詩を好む人が 78 % を占めている。これによれば大體に於て「文學」と云われた時、小説、隨筆、詩を含むものを思い出すものと考えられたのである。以上により、大體に於て「文學」には略々定まつた「感じ」があるものと假定し次の

段階に進んだのである。

III 尺度の作製

1 意見の蒐集及び選擇

「文學」に對する態度を測定する爲には、先づ態度を引出すに足る「意見」を集めることが必要である。この爲慶大文學部學生 45 名に「文學」に對して思い起すあらゆる「意見」を出来るだけ書いて貰つた。この他文學書その他からも「意見」を選び出し合計約 200 の意見を集めた。これらを先づ i) 「文學」に好意を表わしている意見 ii) 中立と思われる意見 iii) 好意を示していない意見 に三大別し、これらを更に K. A. Wang (4) の發表している規準に照らして意見の選擇を行つた。K. A. Wang の規準 (criteria) を要約すれば大略次の如きものである。

i) 各種の意見は論争的のもでなくてはならない。普遍的眞理を述べた文章の如きは不適である。

ii) 各種の意見は一つの解釋しかないような文章でなければならない。多義的な解釋を許すような文章は不適である。

iii) 各種の意見は出来るだけ同じ態度の變化を少しづつ示すようなものでなければならない。

以上の三項目を大略の規準として約 200 の意見より 53 の意見を選択した。これら意見を全て記述することは煩瑣であるので、最後迄問題とした 14 の意見のみを表 I に示した。

2 選擇された意見の客觀的評定

「選擇された意見」は私個人の主觀によつてなされたものであるから、更にこれらを教養ある人々に示し、果してこれら意見が態度を引出すのに適するものであるかどうかを Q 脱逸度によつて検討し、併せてこれら意見を尺度上に出来るだけ等間隔に配列せんが爲に、意見を別々のカードに印刷し、意見の持つ好意度を 11 段階に評定せしめた。評定して貰つた人数は男 28 名女 26 名計 54 名で何れも皆大學學生又は專門學校生徒である。これら評定の結果を累加比に直し、 Q_2 (評定値)、Q 脱逸度と共に示したのが表 I である。

意見の客觀的評定の結果を更に検討する爲、男女別に Q_2 によつて各意見 53 問を好意度順に並べ、Spearman

*慶應義塾大學心理學研究室 (Department of Psychology, Keiogijuku University, Tokyo)

表 I

意見の Q_2 (評定値), Q 脱逸度及び各評定段階に於ける累加比

意見 (原番號による)	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	Q_2	Q
1 文學は人間最高の藝術である	74	81	89	93	94	98	98	100	100	100	100	0.67	0.65
9 文學は如何に生きるべきかを教へる	35	56	74	89	94	98	100	100	100	100	100	1.91	2.26
2 文學は豊かな人間性をつくる	35	50	85	93	96	100	100	100	100	100	100	2.00	1.95
13 文學は自己の見界を廣くする	7	30	72	87	96	100	100	100	100	100	100	2.47	1.29
23 文學は互ひに異性の理解を深めさせる	2	13	54	76	96	98	98	100	100	100	100	2.91	1.61
22 文學は讀書のよろこびを與へる	4	15	37	70	98	100	100	100	100	100	100	3.38	1.63
25 文學は人間を善にも惡にも導く影響をもつ	4	6	9	13	26	93	96	98	98	100	100	5.41	0.73
34 文學は社會の裏を教へる	0	4	7	15	24	54	67	89	96	98	100	5.88	2.27
53 文學は一つの娯樂である	2	4	6	13	24	44	69	89	98	100	100	6.23	2.18
30 文學は感傷的な人間をつくる	0	2	4	7	20	31	56	85	96	100	100	6.77	2.13
42 文學は性への好奇心をそゝる	0	0	0	2	6	20	48	69	83	89	100	7.09	2.17
29 文學は本當に面白くて讀むよりも知的虚榮のために讀む傾向をうむ	0	0	2	6	7	9	30	48	76	91	100	8.06	2.12
32 文學は科學的精神を失はさす	2	2	2	2	4	11	19	37	70	91	100	8.38	1.78
41 文學は虚榮心をそゝる原因となる	0	0	0	2	4	6	9	26	63	85	100	8.65	1.40

の列位差法により男女別の ρ を計算すると $\rho=0.972$ となつた。これによれば男の學生は文科系が多く、女の學生は理科系が多かつたにも拘らず、客觀的に意見を評定したものと思つても差支えないように思われる。

3. 信頼度 P の決定, 類似係數 ϕ への換算, σ 尺度への換算。

同一被験者に二週間の間隔をおいて同じ意見を示しその一致度をを調べることににより信頼度を決定した。その式は

$$P_1 = \sqrt{\frac{n_{12}}{n_1 n_1'}} \text{ を用いた (I)。}$$

n_1 ……意見 1 を最初に被験者に與えた時の選擇の總數

n_1' ……意見 1 を二度目に被験者に與えた時の選擇の總數

數

n_{12} ……意見 1 を 1, 2 回とも選擇した總數

用いた人數は男子學生 (文科, 理科) 259 名, 女子學生 (文科, 理科) 113 名計 372 名である。14 の意見の信頼度は表 II の同時選擇表に示されている。14 の意見の他, 計算した 50 の意見の信頼度より一般的に云えば「文學」への好意度の高い意見は信頼度が高いが, 好意度の低い意見は信頼度も低くなつて現われ, 選擇される數は少いが信頼度の高いというものは見られなかつた。それ

表 II

各對の意見に於ける同時選擇の頻數

	1	9	2	13	23	22	25	34	53	30	42	29	32	41	P
1	177	111	145	135	79	113	101	47	37	51	16	34	8	12	.67
9		285	252	243	137	189	178	95	66	83	41	58	17	21	.71
2			462	388	168	287	275	137	104	120	58	89	20	29	.84
13				496	173	288	303	157	118	126	71	105	31	32	.87
23					199	149	143	87	57	62	48	56	19	23	.72
22						342	212	120	90	99	57	78	25	20	.76
25							360	129	101	106	61	97	27	33	.78
34								184	62	68	44	60	11	19	.69
53									158	56	36	48	11	22	.51
30										151	37	44	18	19	.65
42											84	28	10	15	.44
29												143	14	28	.55
32													40	8	.40
41														55	.43
P	.67	.71	.84	.87	.72	.76	.78	.69	.51	.65	.44	.55	.40	.43	

表 1	表 2
-----	-----

		男	女	合 計
	意見の評定に用ひた人数	28	26	54
文科	信頼度決定の人数	122	64	186
	♂ 決定の人数	277	108	385
理科	信頼度決定の人数	137	49	186
	♂ 決定の人数	176	57	233
文理合併	信頼度決定の人数	259	113	372
	♂ 決定の人数	453	165	618

故尺度を作製するためには、比較的信頼度の低いものも採用せざるを得なかつたのである。

次に表 II の同時選擇數を利用し、各意見間の類似系數 ϕ を求めた。その式は

$$\phi_{12} = \frac{n_{12}}{\sqrt{n_1 n_2 p_1 p_2}} \quad \text{である (1)。}$$

$$n_{12} \cdots$$
 意見 1, 2 を同時に選擇した被
験者の總數

IV 結 果 (1)

信賴度決定に用いた被験者(前出表Ⅲ)

表

[illegible]

表 V
各對の意見間の σ 分離及び尺度値

	1	9	2	13	23	22	25	34	53	30	42	29	32	41
1	.00	-.82	-.87	-1.02	-1.00	-.94	-1.09	-1.38	-1.40	-1.22	-1.68	-1.44	-1.84	-1.72
9		.00	-.46	-.62	-.66	-.63	-.76	-1.00	-1.15	-1.03	-1.20	-1.24	-1.56	-1.54
2			.00	-.32	-.82	-.45	-.60	-.99	-1.03	-.99	-1.20	-1.17	-1.65	-1.54
13				.00	-.85	-.54	-.52	-.89	-.96	-.99	-1.07	-1.07	-1.40	-1.52
23					.00	-.72	-.82	-.94	-1.13	-1.14	-.91	-1.13	-1.36	-1.36
22						.00	-.70	-.91	-.97	-.98	-1.04	-1.10	-1.38	-1.65
25							.00	-.87	-.89	-.98	-1.01	-.93	-1.35	-1.34
34								.00	-.99	-.99	-.94	-1.01	-1.68	-1.45
53									.00	-.96	-.91	-1.01	-1.54	-1.17
30										.00	-.99	-1.18	-1.26	-1.36
42											.00	-1.14	-1.33	-1.16
29												.00	-1.36	-.93
32													.00	-1.33
41														.00
Σ	16.42	11.04	9.42	7.85	6.18	5.45	2.88	0.08	-2.93	-4.49	-7.32	-10.13	-16.38	-18.07
差	5.38	1.62	1.57	1.67	0.73	2.57	2.80	3.01	1.56	2.83	2.81	6.25	1.69	
差 N	0.3843	0.1157	0.1121	0.1264	0.0521	0.1836	0.200	0.2150	0.1114	0.2022	0.2007	0.4464	0.1207	
尺度値	2.4706	2.0863	1.9706	1.8585	1.7321	1.6800	1.4964	1.2964	1.0814	0.9700	0.7678	0.5671	0.1207	0.0000

即ち文科系（慶大経済学部豫科一年）122名，理科系（慶大医学部工学部豫科一年）137名，女子の方は日本女子大一年64名，東京女子医専一年49名の「文学」に対する態度の點は表 VI の如くである。尺度の點は100倍したものを用いた。

表 VI
信頼度決定に用いた被験者郡の平均尺度値

	慶大経済	慶大医工	日本女子大	東京女子医
M	155.86	165.09	168.09	167.80
σ	24.81	29.70	26.12	24.36

表 VI によると日本女子大が一番「文学」に対する態度は高く，次いで東京女子医，慶大医工，慶大経済の順であるが，経済学部を除いては他の差はあまり顯著ではない。 σ が大なるのをみれば大體に於て等しいと認めて差支へない程度ではないと思われる。

次いで類似係数 ϕ 決定に用いた被験者（前出表 III）即ち経済学部277名，医学工学部176名，日本女子大108名，女子医57名を「文学」に対する一般的態度によつて分類してみた。「文学」に対する一般的態度は次の五段階である。

- I 文学は大好きです
- II 文学は好きな方です
- III 文学は好きでも嫌いでもなく中位です
- IV 文学は嫌いな方です
- V 文学は大嫌いです

この五つの段階を示し，自己が「文学」に対して持つ

ている態度に一致する項に○をつけさせ，それと態度の得点との関係を調べたのである。表 VII かその結果である。これによると経済学部，医学工学部，日本女子大に

表 VII
「文学」に対する一般的態度と尺度による態度得点との関係

	経済		医工		日本女子大		女子医	
	M	人数	M	人数	M	人数	M	人数
I 文学は大好きです	154.65	45	169.67	26	164.22	30	175.28	16
II 文学は好きな方です	159.04	145	173.58	75	169.04	51	164.88	30
III 文学は好きでも嫌いでもなく中位です	150.61	80	156.17	63	152.87	21	154.00	10
IV 文学は嫌いな方です	141.21	5	172.76	10	169.29	6	—	0
V 文学は大嫌いです	54.78	1	22.92	1	—	0	—	0

於ては II 文学は好きな方ですの點が一番高く，女子医のみが I 文学は大好きですの點が一番高い。I, II, III に品等した人々の態度の點は一般に大差なく，それらを辨别する力はこの尺度には見られないように思われる。IV, V に品等した人々の態度の點は二つの例外を除いては低く，「文学」に好意をもつ人と「文学」は厭いだという人の間に於ける差は辨别しうるのではないかと考えられる。

V 結 果 (2)

IV に於て豫備的検討をなした後、「文學」に對する尺度の他、兩親の教育程度(1大學高専卒・2中等學校卒・3小學校卒)、古賀行義教授の作製した「スポーツ」に對する態度測定尺度及び日本大學作製の男性度女性度検査法を併用し、それらとの關係をみようとした。用いた被験者は表 VIII の如くである。

表 VIII
結果(Z)に於て用いた被験者

	2 年	3 年	計
經濟學部予科	—	114	114
法學部予科	25	31	56
文學部予科	31	26	57
			227

「文學」と「スポーツ」の態度の點及び兩者の相關をとれば表 IX の如くなる。醫工、女子醫は尺度値決定の時の data を用いた。

表 IX
「文學」と「スポーツ」との r 及び「文學」、「スポーツ」の M 及び σ

	文學とスポーツの r	文學の M	σ	スポーツの M	σ
文經法 222 名	0.206	169.85	27.90	131.51	20.21
醫工 158 名	0.467	168.05	29.70	135.89	11.85
女子醫 49 名	0.039	167.83	24.36	144.53	5.65

醫工學部が一番相關が高く、文經法、女子醫となつてゐる。文經法に於ける $r=0.206$ は歸無假設を $\rho=0$ とおいて検定したが、 $\rho=0$ とは認められないことを示した。

次いで「文學」と「男性度女性度検査」との r をとれば(文經法 222 名) $r=-0.032$ となり、「スポーツ」と「男性度女性度検査」との r をとれば(文經法 210 名) $r=-0.043$ となつた。男性度女性度検査法は 5 項目に分れてゐる。即ち

- 1 項 怒りの situation を與えて反應をきく
- 2 項 恐怖の situation を與えて反應をきく
- 3 項 嫌惡の situation を與えて反應をきく
- 4 項 同情の situation を與えて反應をきく
- 5 項 邪惡の situation を與えて反應をきく

以上の各項と「文學」、「スポーツ」との r をとれば表 X の如くである。

表 X

「文學」「スポーツ」と男性度女性度検査の各項との r (文經法 221 名)

	I 恐リ	II 恐怖	III 嫌惡	IV 同情	V 邪惡
文 學	0.036	0.042	-0.445	-0.128	-0.063
スポーツ	-0.011	0.053	-0.253	-0.111	-0.090

III 嫌惡を示す項の r が「文學」との場合少し高いのを除いては他は 0 は近いものとみて差支えないと思われる。

次に兩親の教育程度(1大學高専卒・2中等學校卒・3小學校卒)によつて「文學」の態度をみたのであるが、殆ど點の動きは認められなかつた。「スポーツ」に對する態度も「男性度女性度検査」の結果も同様に分類してみたが、殆ど差は認められなかつた。

VI 要 約

1. 慶大經濟學部豫科、醫工學部豫科、日本女子大、東京女子醫專の間に於ては「文學」に對する態度は殆ど差が認められなかつた。女子の方が少しく高いようにも思われるが σ が大である爲に有意には思われぬ。これが尺度の誤差からくるものであるか、本來的にそうであるかは今後の検討を要する。

2. 「文學」に對する一般的態度を辨別しうる力をこの尺度は持つていないように思われる。但し「文學は大好きです」と「文學は好きな方です」を一まとめにし、「文學は好きでも嫌いでもなく中位です」より以下 IV V の一般的態度を一まとめにすれば、その差は略々辨別しうるように思われる。

3. 「文學」に對する態度と「スポーツ」に對する態度の相關は文經法 0.206、醫工 0.467、女子醫 0.039 であり、一般に低い。

4. 「文學」に對する態度と「男性度女性度検査」との相關は -0.032 であり、「スポーツ」に對する態度と「男性度女性度検査」との相關は -0.043 であり、殆ど相關はないものと思われる。

5. 「男性度女性度検査」の各 sub-test との相關は「文學」に對する態度と III (嫌惡をきく問題) の間に -0.445 の反對關係が少しくみられ、「スポーツ」に對する態度と III との相關 -0.253 が認められる以外は殆ど 0 に等しい。

6. 兩親の教育程度によつて「文學」「スポーツ」「男性度女性度検査」の點には殆ど差は認められないように思われる。

以上が大略の暫定的結果であるが、態度測定には對象の選擇と意見の作製が非常な影響を及ぼすように思われる。この點は慎重に考慮されるべきであると感じた。

ABSTRACT

In this study, the attitudes of college students towards literature were measured by a scale constru

cted after the manner of Thurstone's attitude scale (1) and compared with their attitudes towards sports as measured by Prof. Koga's scale (2) and with their emotional responses as tested by Terman's M-F Test, Part III (3). An attempt was made also to see if there were any relation between the results of these tests and the educational grades of the parents of the t stees.

Construction of the scale..... Out of about 200 opinions on literature collected by the writer, 53 were selected on the basis of K. A. Wang's criteria. These were rated by 54 judges and three of them were omitted on account of their high Q values. To test the reliability, the remaining 50 statements were then given to 372 students who gave ratings twice at an interval of two weeks. The statements finally adopted and their scale values follow:

No.	Statements	Scale values
1.	Literature is the highest art of mankind.	2.4706
2.	L. teaches us how to live.	2.0863
3.	L. cultivates a sympathetic attitude towards life.	1.9706
4.	L. gives us a wider view of life.	1.8585
5.	L. promotes the mutual understanding between men and women.	1.7321
6.	L. gives us the pleasure of reading.	1.6800
7.	L. has both good and bad effects upon us.	1.4964
8.	L. exposes the dark side of life.	1.2964
9.	L. is an amusement and nothing more.	1.0814
10.	L. makes man sentimental.	0.9700
11.	L. excites our curiosity about the opposite sex.	0.7678
12.	L. is read by those who want to satisfy their vanity rather than by those who seek genuine pleasure.	0.5671
13.	L. deprives us of scientific spirit.	0.1207
14.	L. is apt to make man vainglorious.	0.0000

Discrepancies between the experimental scale separation and the calculated scale separation were 13 % of the total range of scale values. This was perhaps due to the ambiguity of the meaning of literature.

Results..... The scale was given to three groups of students: the students of 1) Department of Literature, of Economics and of Law, 2) Department of

Medicine and of Engineering, of Keiogijuku University and 3) Tokyo Girls' Medical College. The total number of subjects was 794. The results may be summarized as follows:

1. With respect to the attitude towards literature, there was practically no difference among the different groups of students. The female students showed a little more preference towards literature than the male students, however, the difference was found to be statistically insignificant.

2. The scale used seemed to be inadequate to discriminate between the five general attitudes towards literature as expressed in the following statements: (1) I decidedly like literature, (2) I rather like literature, (3) I neither like nor dislike literature, (4) I rather dislike literature and (5) I decidedly dislike literature. However, it may discriminate 1) and 2) from the remaining three attitudes, 3) 4) 5).

3. The coefficients of correlation between the attitudes towards literature and sports were:

- (a) Dept. of Literature, Economics & Law ... 0.206
- (b) Dept. of Medicine & Engineering ... 0.467
- (c) Girls' Medical College ... 0.039

Application of null hypothesis ($\rho=0$) to (a) showed that the correlation was significant at its value.

4. The coefficient of correlation between the attitudes towards literature and the results of the emotional response test was -0.032 and that between the attitudes sports and emotional responses was -0.043 .

5. The educational grades of the parents of the t estees had no influence upon the results the various tests given in this study.

文 献

1. L. L. Thurstone, Theory of attitude measurement. *Psychol. Rev.* 1929, 36, 222—241.
2. 古賀行義「競技に對する態度の測定」心理學研究第九卷, 五・六輯, 211—235.
3. 日本大學作製「簡易態度検査法」
4. K. A. Wang Suggested criteria for writing attitude statements. *J. Soc. Psychol.*, 1932, 3, 367—373. (紹介: 波多野完治「現代心理學說研究」上卷220—224)
5. O. H. Rugg, Statistical methods applied to education. Appendix, Table II, 388, 1917.

(1949年9月15日原稿受付)